

Title	「魂の座」：ノヴァーリスとカント
Sub Title	Der Sitz der Seeie : Novalis und Kant
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1983
Jtitle	哲學 No.77 (1983. 12) ,p.27- 53
JaLC DOI	
Abstract	Die Kant-Studie von Novalis aus dem Jahre 1797 beleuchtet von einer neuen Sicht jenen Umbruch des Denkens, der sich mit dem Fruhjahr 1797 in Novalis vollzieht und sich ganz klar und deutlich in der Beschäftigung mit dem holla.ndischen Philosophen Franz Hemsterhuis aus dem Herbst dieses Jahres abzeichnet. Sie weist also verschiedentlich 'alai die Auseinandersetzung mit Hemsterhuis zuruck, vor allem mit dem hier erstmals und plötzlich auftauchenden Plan, die Wissenschaften wissenschaftlich und poetisch zu behandeln. Und im Nachsatz heiBt es, Sollte practisch und poetisch eins seyn-und letzteres nur absolut practisch in specie bedeuten ? Man fuhl wahrscheinlich, wie Novalis auch hier die Kantische Grundlage zu eng erscheint, um seine eigene, enzyklopadisch begrundbare Metaphysik zu ermöglichen. Hier in diesem Exzerpt wird also die praktische Losung des Erkenntnisproblems durch Kant radikal umgedeutet und zugleich die Antwort auf die Zentralfrage der Transzendentalphilosophie nunmehr der Poesie zugewiesen. Auf diese Weise findet Novalis in der Auseinandersetzung mit Kant den eigenen Standort. Manche selbständig-kritischen Zusatze der Studie (z. B. „der Poesie-Begriff“, „der Sitz der Seele“, „der Begriff von Sinn“, die Frage nach der Erkenntnis und Erkenntnismöglichkeit des Unbedingten“, „der Genie-Begriff“ u. s. w.) offenbaren. uns in merkwittdiger Weise die Geburtsstunde des Roniantikers Novalis.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000077-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「魂 の 座」

——ノヴァーリスとカント——

柴 田 陽 弘*

„Der Sitz der Seele“

——Novalis und Kant——

Takahiro Shibata

Die Kant-Studie von Novalis aus dem Jahre 1797 beleuchtet von einer neuen Sicht jenen Umbruch des Denkens, der sich mit dem Frühjahr 1797 in Novalis vollzieht und sich ganz klar und deutlich in der Beschäftigung mit dem holländischen Philosophen Franz Hemsterhuis aus dem Herbst dieses Jahres abzeichnet. Sie weist also verschiedentlich auf die Auseinandersetzung mit Hemsterhuis zurück, vor allem mit dem hier erstmals und plötzlich auftauchenden Plan, »die Wissenschaften wissenschaftlich und *poëtisch*« zu behandeln. Und im Nachsatz heißt es, »Sollte *practisch* und poetisch eins seyn—und letzteres nur absolut practisch in specie bedeuten?«

Man fühlt wahrscheinlich, wie Novalis auch hier die Kantische Grundlage zu eng erscheint, um seine eigene ‚enzyklopädisch‘ begründbare Metaphysik zu ermöglichen. Hier in diesem Exzerpt wird also die praktische Lösung des Erkenntnisproblems durch Kant radikal umgedeutet und zugleich die Antwort auf die Zentralfrage der Transzendentalphilosophie nunmehr der *Poesie* zugewiesen. Auf diese Weise findet Novalis in der Auseinandersetzung mit Kant den eigenen Standort.

Manche selbständig-kritischen Zusätze der Studie (z. B. „der Poesie-Begriff“, „der Sitz der Seele“, „der Begriff von Sinn“, „die Frage nach der Erkenntnis und Erkenntnismöglichkeit des »Unbedingten«“, „der Genie-Begriff“ u. s. w.) offenbaren uns in merkwürdiger Weise die Geburtsstunde des Romantikers Novalis.

* 慶應義塾大学文学部助手 (独文学)

I

ノヴァーリス研究家の間で手稿DとかS14とかK53, 64-65などと呼ばれている原稿群がある。レッシングの『ラオコーン』批判で始まるこのカント研究草稿は、その紙質と判型、および筆蹟と内容から判断して、ヘムスターホイス研究に平行するか、その直後の、ほぼ1797年の晩秋に成ったものと推定されている。元来この研究ノートが世に出る経緯には紆余曲折があり、1929年のP.クルックホーン編纂の著作集⁽¹⁾でも言及はされているものの、編者はこれを1795/96年の成立と判断し、しかもその内容を軽視して著作集に収めることをためらった。ノヴァーリスの遺した研究ノートは厖大で、紙型の異なる大小さまざまな紙に書かれている。これを内容と年代に応じて分類整理する難事業にあえて先鞭をつけたのは、詩人の姪のゾフィー・フォン・ハルデンベルクだったが、それをE.ハーヴェンシュタインが引き継ぎ、P.クルックホーンがさらに整備して次第に今日の体裁をととのえるにいたった。しかし上の研究ノートの取り扱いの如く、まだそこにはかなりの試行錯誤が介在し、現在刊行中のコールハマー社版の新著作集⁽²⁾によってノヴァーリス学の考証の集大成がなされるまでには、ノヴァーリス研究にも幾多の曲折があったことは言うまでもない。ノヴァーリス研究史を概観すると、良きにつけ悪しきにつけ、そのときどきに刊行された著作集の編纂方針に強く影響を受けていることが一目瞭然であるが、カント研究ノートもそのような運命を免れなかった。R.ザムエルの報告している1930年の競売カタログにも、このノートの存在が記載されている⁽³⁾。しかし1960年の競売でふたたびせりかけられ、新著作集に収められるまでは、限られた研究者の眼にふれるだけの幻の存在だった。T.ヘーリングも明らかにそのような研究者のひとりだったが、それにもかかわらず、このカント研究ノートの彼の評価は否定的である⁽⁴⁾。「カントはノヴァーリスにとって、フィヒテの先行者であり準備者であるが、それ以上のものでは

ない。そしておそらく独自の影響を彼に及ぼすこともなかったであろう」と述べ、さらにカントの『道徳形而上学』からの抜萃に関し、ノヴァーリスに特別な影響の痕跡など見い出せないと断定している⁽⁵⁾。そもそもノヴァーリスの哲学研究ノートの特徴は、原典の読書を通じて啓発をうけると直ちに抜き書きをし、ときに忠実に、ときに自由に表現をかえるかと思うと、独自の思想の着想を書き留めたりするという類のものである。したがって原典とノヴァーリスの補足との境界を絶えず計量しながらノートを読み進める必要がある。T. ヘーリングのカント・ノート過少評価には上の事情も考慮しなければならないが、なによりも、T. ヘーリングがその著書『哲学者としてのノヴァーリス』で意図しているのは、フィヒテからヘーゲルにいたる弁証法の展開の流れを想定し、ノヴァーリスをヘーゲルの先駆として位置づけようとするためである。そしてその独自性を、「あらゆる認識のための体系の本質と必然的機能とを得ようと努めた」思想家としての側面に見ようとする⁽⁶⁾。断章形式という独得の表現方法を武器に、体系を忌避して、「定立・反定立・総合」という認識体系をそれ自体で完結したものとみなすヘーゲルの当然こうむらねばならなかった体系の硬化を、これによって免れている点を、ヘーリングは看過しているのである。そもそもノヴァーリス思想を認めるにせよ、認めないにせよ、先験哲学の枠組の中に取り込んで解釈しようとする傾向は、H. ジーモンの『魔術的観念論』を嚆矢とする⁽⁷⁾。彼によれば、ノヴァーリスのいわゆる魔術的な「自我」は、カントの先験的統覚とフィヒテの絶対我を拡大したものである。これを継承して、K. ハンブルガーは「ノヴァーリスと数学」において、カントの「認識論」とノヴァーリスの「魔術」とが「総合」概念でつながっていることを証明しようとする⁽⁸⁾。このように先験哲学の発展線上にノヴァーリス思想をおこうとする伝統的解釈は、H. クーンの「詩的総合——ノヴァーリスの断章におけるロマン哲学とポエジーに関する一つの批判的試み」において頂点に立ったと言ってよい⁽⁹⁾。彼によれば、ノヴァーリス思

想は決して新しくはなく、「フィヒテ的理念の単なる新しい実践にすぎない。」このようなノヴァーリス解釈の一傾向は、主としてヘーゲル右派による哲学史記述の流布と軌を一にしているように思われる。すなわち、カントの批判哲学からヘーゲルの絶対的観念論へいたる発展の中で、フィヒテの知識学とシェリング哲学は踏台としての意味しかもたず、フィヒテはカントを克服し、シェリングはフィヒテを、そしてヘーゲルはシェリングを⁽¹⁰⁾超克して先験哲学は完結するという見方である。

ノヴァーリス思想を解釈するもう一方の傾向は、M. ディックの『ノヴァーリスの断章におけるポエジー思想の展開』を⁽¹¹⁾頂点にしている。ディックによれば、ノヴァーリスはその哲学研究を通じて独特のポエジー思想を育み、ついには、その概念は「彼自身の文芸作品を越え、彼の時代さえも越える」⁽¹²⁾ほどになると言う。フィヒテの『知識学』という⁽¹³⁾厳密な哲学体系の徹底的研究から、「観念連合 Association」と「偶然生産 Zufallproduktion」としてのポエジーという独自の思想を生みだすにいたる軌跡をたどることができる⁽¹³⁾と主張されるのである。このような解釈を、H.-J. メールもG. シュルツも基本的に受け入れており、これが新著作集刊行前後からの⁽¹⁴⁾主流となった動向であると言ってよい。1797年の3月19日に許嫁のゾフィー・フォン・キューンが死んだ後、ノヴァーリスの中で芽生え、急速に成長をした着想が、同年秋のヘムスターホイス研究で明瞭な思想変革の様相を呈示したのちに、なぜノヴァーリスはカントに取り組んだのかが問題の焦点となるだろう。カント・ノートの検討によって、ノヴァーリスのカントへの回帰が何を意味するのかが明らかになるに違いない。本稿はノヴァーリスとカントの関係、とくにそのカント研究ノートが、ノヴァーリスの思想世界にどのような位置を占めるのかを考察するものである。

II

⁽¹⁵⁾ノヴァーリスが1797年の晩秋にカントと取り組む以前に、すでにカント

に習熟していたことは、遺っているわずかな手掛りからも推察できる。1790年の10月23日に、18歳のノヴァーリスはイエーナ大学に法律学の学生として入学登録をする。⁽¹⁶⁾ イエーナ市はおよそ4500人の住民のうち800人以上が学生という文字どおりの大学町だった。イエーナ大学は当時、ハレ大学とともに、中央ドイツの最大の大学であり、充実した教授陣によって、18世紀の最後の十年間、ドイツの精神界の指導的立場にあった。ノヴァーリスはここに翌年の9月まで過ごすのであるが、その間に、哲学を講じるK. L. ラインホルトと昵懇になり、歴史学の員学教授だったF. シラーに親炙している。またかつてノヴァーリスの家庭教師だった哲学者のK. Chr. E. シュミートとも再会する。K. L. ラインホルトは最も早い時期からのカント哲学の普及者で、ヴィーラントと協力して刊行した「トイッチャー・メルクーア」に、1786年と1787年の両年にわたり『カント哲学についての書翰』⁽¹⁷⁾を連載して好評を博した。1787年からイエーナ大学の哲学教授の地位にあり、1789年には『人間の表象能力の新理論の試み』⁽¹⁸⁾によっていわゆる「意識の命題」を樹てて、カント批判哲学に新しい地平を切り拓こうと試みている。「ひとは、意識によって強制され、どんな表象にも、表象する主体と表象される客体とが属し、この両者はそれが属する表象から区別されなければならないという点において意見が一致している。」⁽¹⁹⁾ ラインホルトはこの命題を出発点にして「エレメンタール・フィロゾフィー」を構想、カントの哲学体系に一層の整合性を与えようと努力した。ノヴァーリスは、フィヒテやシェリングなどのドイツ観念論のその後の展開に重要な影響を与えるこの哲学者の最も生き生きと活躍した時期に出会っている。当然のことながらカント哲学に関心を唆られたことは想像に難くないが、のちに告白しているように、彼は哲学の言葉に習熟するには余りに移り気⁽²⁰⁾だった。この頃、学問に集中せずにかなり享樂的生活を送っていたノヴァーリスにとって、ラインホルト以上に崇拜の対象となったのは、『ドン・カルロス』の作者にして、「ギリシャの神々」の詩人シラーだった。19歳

のノヴァーリスにシラーが与えた印象がどんなに深かったかは、1791年の4月に「ノイヤー・トイッチャー・メルクーア」に載った詩「ある若者の嘆き」⁽²¹⁾や、1791年9月22日付シラー宛書翰、1791年10月5日付ラインホルト宛書翰、1791年10月7日付シラー宛書翰に明白である。⁽²²⁾シラーをカント哲学に導き入れたのはラインホルトで、1787年のこととされているが、シラーが批判哲学に本格的に取り組み始めるのは『判断力批判』が出た1791年以降である。⁽²³⁾1792年のケルナー宛書翰で、目下カント哲学の研究に従事していると報告し、これを究めるまで徹底してやり抜くという固い決意を語っている。シラーはカントとの対決を通して、次第に道徳的優美の理想のイデーをつくりあげていくのであるが、ノヴァーリスがイエーナ大学に在学中には、上の事情からみて、シラーからカント哲学の手ほどきを受けたという証拠はない。むしろ後年までノヴァーリスの中に深く刻みつけられたのは、当時31歳のシラーから発散していた克己心に豊んだ厳格な人道主義であったと思われる。さらにノヴァーリスにとってシラーは、人生における義務感、職業への使命感を植え付けてくれた人としての意味をもっている。これにはもう一人のカント学者 K. Chr. E. シュミートがかかわっている。彼は1782年、ノヴァーリス10歳の折りに、家庭教師としてニーダーザクセンへの旅に同伴、ルクルムの伯父 F. W. v. ハルデンベルクの許に滞在している。1781年に『純粹理性批判』の第一版が出ているから、明らかにこの家庭教師時代に後の人生を決定する批判哲学との出会いがあったはずである。1784年イエーナ大学に戻り、マギスターの称号をとってから、1785年夏に講師として『純粹理性批判』を祖述し始める。1791年、30歳でギーゼン大学の論理学と形而上学の正教授となる。ノヴァーリスとの再会はこの時期であったが、すでに1786年に『カントの著作の利用を容易ならしむるための辞典』⁽²⁴⁾を出版していた。この辞典は常にノヴァーリスの座右にあって、1796年のフィヒテ研究の際にも利用されている。⁽²⁵⁾若きノヴァーリスが文学にうつつを抜かし、本業の法律の勉学を懈怠しているの

を憂えた謹厳にして禁欲主義の父親の請いを入れて、シュミートは父親の代理として、1791年7月1日にシラーに書翰を送っている。この青年の尊敬を一身に集めている貴下が、将来の社会生活の準備を真面目にするよう忠告してくださるとありがたい、という文面である。⁽²⁶⁾ その直後にシラーがおこなった面談はたちまちに効果を表わし、同年9月22日のシラー宛ての手紙で、ノヴァーリスは、誰の訓戒と忠告にも増してあなたのお言葉は身にこたえた、と書くほどであった。こうしてノヴァーリスは新たな決意に燃えてライプツィヒ大学へ転学するのであるが、「来たる世紀の教育者」⁽²⁷⁾としてシラーを見ていたにせよ、シラーによってカントの仲介があったという証拠はない。このようにイエーナでのカントとの係わりがどの程度のものであったかは今となっては推量の仕様がないのである。1791年イエーナでの「メモ」に、「哲学：シラー、ヘルダー、レッシング、私自身、カント」⁽²⁸⁾とあるだけである。ライプツィヒ大学時代にノヴァーリスをカントへ導いたのは、生涯の友として共にロマン主義の推進者となったF. シュレーゲルだった。1793年春にノヴァーリスはカントの倫理学を研究し、その「道徳性に関する思想とカントの学との関連」において、ノヴァーリスの独創性が遺憾なく発揮されて、シュレーゲルを瞠目せしめた。⁽²⁹⁾ 1791年10月5日のラインホルト宛て書翰で、ノヴァーリスはこれからの勉学の目標として、「法律学、数学、哲学」の三つに集中する旨宣言している。この決意が、間違いなく実行されていることがこれからもわかるのである。

1795年夏に、すでにテンシュテットの郡役所の書記になっていたノヴァーリスは、イエーナ大学教授にしてカントおよびフィヒテの祖述者ニートハマーの許で初めてJ. G. フィヒテと会っている。その晩の客にはヘルダーリーンもいた。フィヒテは1794年から、キール大学へ移ったラインホルトの後任として、イエーナ大学で教えていた。ニートハマーの日記によれば、その晩は、宗教と啓示について、また哲学について活発に意見が交わされた。⁽³⁰⁾ 同年の秋に、ノヴァーリスはフィヒテ研究を徹底しておこなう。

「魂の座」

その歴大な研究ノートから、ノヴァーリスがフィヒテとは異なる独自の思想と思考法を育みつつあることがうかがわれるのである。⁽³¹⁾ そのほかにもカントの範疇論をはじめとしてカント哲学の精通を示す思索がいたる所にちりばめられている。1795/96年のフィヒテ研究の時点で、少くともカントの『純粹理性批判』を相当に読み込んでいたことが推察されるのである。その後、1797年3月のゾフィー体験によって「不可視の世界」への眼をひらかれたあと、10月から11月にかけてオランダの神秘的道德哲学者ヘムスターホイスと取り組んでいる。おおよそ上のような思想体験のあとで、ふたたびカントへ回帰したのはなぜか。これについては、H.-J. メールが⁽³²⁾ ぎのように推論している。カント・ノートには自然哲学者で医者だったC. A. エッシェンマイヤー（1768—1852）の著作からの抜き書きが含まれている。『化学的、医学的对象に応用された自然形而上学の命題』からの⁽³³⁾ ものである。彼はフィヒテの「知識学」の原理を自然科学に応用しようと⁽³⁴⁾ 試み、物質の根源的な力を引力と斥力に見て、しばしばカントの「運動学」を示唆している。エッシェンマイヤーの『自然形而上学』は、本質的にカントの『自然科学の形而上学的原理』に基づいていると⁽³⁵⁾ いうてよいから、この読書がきっかけになってカントに向かったということが十分に考えられる。また1797年8月に『道德形而上学』の第二部が出版されて、⁽³⁶⁾ 再びカントを読み始める刺激になったと推定することができる。さらにフライベルクの鉱山アカデミーへの入学が目前に迫っていたこと（1797年12月1日）が、カントの自然科学方面の著作に取り組ませるきっかけになった。またフィヒテがその頃『知識学の第二序論』⁽³⁶⁾ を上梓し、カントとの対決の姿勢を明確化したこと。そして最後に、カントとフィヒテ、および両者の関係について研究中であったF. シュレーゲルが、7月初めから末にかけてヴァイセンフェルスのノヴァーリスを訪問し、その哲学ノートを持参したこと。以上のような外的要因のほかに、ノヴァーリスの内部に育っていた内的動機があるに違いない。その第一は、フィヒテとの徹底した対

決によって、ノヴァーリス独自のポエジー思想が展開中であったことであり、第二は、1797年春に新たに、フィヒテの『全知識学(36)の基礎』、『知識学(37)の特性概要』、『知識学(38)の諸原理による自然法の基礎』に没頭し、秋にはヘムスターホイスに集中して、この両者の間に独自の地歩を占めねばならないと感じるようになったことである。「先験的観念論の予言者」としてのヘムスターホイスと、観念論のきわめて大胆にして一面的な完成者としてのフィヒテから理解することができ、また同時にそこから固有の萌芽が独自に展開され得るような先験哲学の地盤と根源への回帰が、すなわち『純粹理性批判』の新たな検討が、ノヴァーリスには不可避のことに思われたのである。

ノヴァーリスのカント観は否定と肯定の間を揺れ動いている。近代哲学史におけるカントの功績を正当に評価しつつも、厳正に批判の眼を向けるという醒めた態度を維持しつづける。たとえばカント・ノートにつぎの断章がある。「カントの方法全体——カントの哲学の仕方は一面的である——そしてそれをスコラ哲学と呼んでも不当とは言えないだろう。もちろんそれはそれで最高のもの——人間精神の注目すべき現象のひとつではある。(39)」さらに固陋な哲学体系に関してカントを引き合いに出して、「体系が偏狭であればあるほど、世間の利口者たちのお気に召すものである。だから唯物論者の体系やエルヴェシウスやロックの学説がこの手の連中の中で最高の喝采を博したのである。だからカントは、今もなお相変わらずフィヒテより信奉者があることだろう。(40)」そしておそらくは相対的観念論を指して、「カントの弁護士根性(41)」と評し、さらに「カントは倫理学を法律的に取り扱ったように思われる(42)」と述べている。そして「神秘主義は理性を殺すか？——カントは独断論を信じている——独断論は関係を止揚する活動ないし非活動である」とも言う。(43)

しかし一方では過不足なくカントを褒めあげている。

「ここでカントはコペルニクスの役割を演じ、経験的自我を外部世界と

「魂の座」

並べて惑星と説明し、体系の中心を道徳法則あるいは道徳的自我の中に置いた——そしてフィヒテ・ニュートンは内部の世界体系の法則発見者——第二のコペルニクスになった。⁽⁴⁴⁾

カントはコペルニクスに、フィヒテはニュートンないし第二のコペルニクスになぞらえられる。ところがまた、「フィヒテはカントの批判の改訂者——第二のカントである——カントが低い器官である限り、高次の器官である」⁽⁴⁵⁾とも評価する。ノヴァーリスにとって「カントは確固たる、静止している、立法の^{アプリアリ}先天的な力を我々の内に定立する（——先輩哲学者たちはそれを我々の外に定立する⁽⁴⁶⁾）」ような人である。カントの理論哲学の功績を、不可能な絶対的認識と唯一可能な単なる認識とに分けるという画期的な方法に認めながら、ノヴァーリスの目指した宇宙的百科全書学ないし形而上学の観点からは、カントの依って立つ基盤がいかに狭く思われた。カント・ノートや他の断章に特徴的なノヴァーリス固有の補足は、カントの認識問題の実践理性による解決を解釈し直すことによって、「ポエジー」の意義を拡大しようという試みを示しているのである。

ノヴァーリスにつぎの断章がある。

「カテゴリー一般は可能な質料——現実の形相、必然的自我、ないし両者を一緒に必然的に含んでいる。

カントは哲学の可能性を、ラインホルトは現実性を、フィヒテは必然性を基礎づけた。⁽⁴⁷⁾

懐疑論者シュルツによってエレメンタル・フィロゾフィーが論駁されて以来、ラインホルト過小評価が定着したように見える。⁽⁴⁸⁾批判主義と知識学をつなぐ中間段階に過ぎないとする見方である。クレムトと並んで、ノヴァーリスもこのような伝統的見解に異を唱えているように思われる。先験哲学の体系化における障害を、独自の表象能力の理論によって切り抜けようとしたラインホルトの独創性、明晰性、斬新性を十分に評価した上で、彼をカントおよびフィヒテと同列に置いているのである。このように

断章のいたる所に光っているノヴァーリスの冷静な視線は、カント・ノートにあっては主として「魂の座」と「無制約者」と「感覚の概念」にそそがれている。次章ではこの点を検討することにしよう。

III

カント・ノートの初めの方に「魂の座」をめぐる抜萃が出てくる。医者で生理学者でもあったザームエル・トーマス・ゼメリングの著書『魂の器官について』⁽⁴⁹⁾からの抜き書きであるが、カントの「心」の概念と関連している個所である。

「カントは心をこう理解している、所与の表象を構成し、経験的統覚の統一を生ぜしめる能力であると／魂の実体—— anima ではなく、animus ⁽⁵⁰⁾である／」

ノヴァーリスにとって「魂の座」をめぐる思索は、1797年5月13日の日記に記されているゾフィーの墓での体験以来、とりわけ深まりゆく一方であり、ヘムスターホイスの「道德器官論」や、カントの「無制約者」や「感覚論」との関連で常に念頭を離れることのない想念であったといっている。この「魂」の所在について、カントはこう書いている。

「わたしがわたしの魂の、つまりわたしの絶対我の場所を、どこかの空間に目の辺りに見せなければならぬとしたら、わたしのすぐ近くを取りまいている物質を知覚するのと同じ感覚で、わたし自身を知覚しなければなりません……さて魂は内的感覚によってのみ自らを知覚できるが、肉体を知覚できるのは（それが内的であれ外的であれ）、外的感覚によってだけです。自分自身の場所を自ら規定することは全然できないのです。と申しますのは、魂はこの目的のためには自らを自分の外的直観の対象に

「魂の座」

し、自分自身の外側に自分を置かなければならないでしょうから。それは自己矛盾です。——つまり形而上学に期待されている魂の座についての課題の解決は、途方もない規模になってしまうのです。⁽⁵¹⁾

この「自己矛盾」を消去して、この問題に決着をつけることができると信じたノヴァーリスなりの解答が、1798年の『花粉』の一断章に出てくる。

「魂の座は、内部世界と外部世界の触れ合うところにある。両者が浸透し合うところなら、その浸透のあらゆる点にある。⁽⁵²⁾」

このきわめて明晰な断定の口調は、『普遍的草稿』(1798/99)では揺れ動いている。

「心理学。魂は同様に人工の産物なのだろうか、それとも偶然の産物だろうか？ 魂の座も、恣意的であろうか、偶然的だろうか？ 魂構成学。⁽⁵³⁾」

このような一連の思索は、「内部感覚」と「外部感覚」についてのカント・ノートと同一線上にある。前述の日記の記載とは、「夕方、ゾフィーのところへ行く。そこで私は名状しがたい喜びに浸った——きらめく恍惚の瞬間——私は眼の前から墓を塵のように吹きとばした——数世紀が数瞬間にもひとしかった——ゾフィーが近くにいると感じられた——彼女がいつでもその姿を現わすはずだと思った。⁽⁵⁴⁾」の個所を指す。ゾフィーの死後、絶えず自殺を想っていた頃のこの体験によって、時間と空間を超えた世界を感覚する可能性についてのノヴァーリスの確信が強まったと解釈することができる。外部の表象世界にありながら、内部世界を感覚できるという経験である。これをきっかけにして「見えない世界」への想いがいよいよ深まっていくのであるが、ヘムスターホイスの「真に予言的⁽⁵⁵⁾」な哲学との

出会いが、その深化を助けることになった。悟性の過信によって、人間の内部の無限の空間を感覚する能力が鈍磨していることを、ヘムスターホイスは指摘する。世界の本質は、科学によって探求しようとする限り、決して我々に開示されることのないものである。フィヒテはそれを求めて、絶対我という抽象的統一原理を設定したが、ヘムスターホイスはむしろそれは外部の現象世界 (l'univers visible) に隠れているものだと主張する。

「あまたのこれらの有限で定まった客体の中に、偉大な無限の原理に刺戟された、この原理に対する無限の類似物を見い出そうという、当てのない並外れた希望を懐きつつ、さらに先へと進んでゆくのである。」⁽⁵⁶⁾

このような原理を、あたかも無限遠点のように永遠に追いもとめる決して報いられることのない活動を、ノヴァーリスはこう表現している。

「われわれはいたるところに絶対的なものを求めるが、見出すのはいつも事物だけである。」⁽⁵⁷⁾

ヘムスターホイスは宇宙のこの未知の神秘を、「道德的側面」(la face morale de l'univers) と呼んでいる。この側面には人間の道德器官が関連している。

「この器官は神聖なものに向けられている、眼が光に向けられているように。」⁽⁵⁸⁾

神聖なものに向けられ、高次の世界を洞察する人間の内部の道德器官の能力は、知力の重視によってその神通力を失なっている。このまどろんでいる能力を意識的に発達させ、完成へと導くことがまさに「道德的」なの

「魂の座」

であると主張される。

「朝の星のかすかな光では、眼はまわりの客体をほとんど識別することはできない。しかし太陽が昇ると、可視の世界が姿を現わす。おそらく精神の本質の伝達手段は、この生のあけぼのの後にもっと多くのエネルギーをもつであろう。あるいは、おそらく知覚と心の器官は、われわれが大雑把に扱っては、その能力をふるうことはできないだろう。それらは、さなぎの皮膚の下に隠されているまだ形を成さない羽のようなものである。⁽⁵⁹⁾」

「いくつかの幸せな魂が昇華するのは、このような羽をもってである。それらの魂は専ら自己完成をめざしている。それらは、自分のまわりの地上的な死すべきあらゆるものから解き放たれる。それらは進化の度合を速める。新しい器官が現われる。われわれと神との関係がより直截的になるのはこの時であり、いろいろな側から宇宙がわれわれに顕現するのはこの時である。⁽⁶⁰⁾」

ノヴァーリスはヘムスターホイスのこのような神秘的予言に刺激されて、カントの「感覚の概念」の研究へと向かう。つぎのノヴァーリスの問いかけは、カントの『自然科学の形而上学的原理』の序に関連している。

「感覚の概念。カントによれば、純粋数学と純粋自然科学は外的感覚の形式に関係する。どのような学問がいったい、内的感覚の形式に関係するの⁽⁶¹⁾か？」

カントによれば、自然は感官の対象として、したがって経験の対象となりうる一切の物の総体として、すなわちあらゆる現象の総体として解されるが、このような実質的意義に解された自然は、外的感覚(外官)の対象と内的感覚(内官)の対象とに分けられる。前者は延長的自然を研究する物体

論であり、後者は思惟的自然を扱う精神論の分野である。それでは内官の形式に関連する学問とは何か。カントの答えはきわめて限定的である。内部感覚の現象や法則には数学は適用されないゆえに、また体系的な分析技術や実験論としても化学に近づけないゆえに、経験的精神論は、せいぜい内部感覚の体系的自然論、すなわち魂の性質記述たりうるが、精神科学とはなりえず、心理学的実験論にすらなりえない⁽⁶²⁾。

カントにあっては、外界の物の現実的存在は、私自身の現実的存在の規定のなかに必然的に含まれ、この私の存在の決定とともに、唯一の経験を構成するものだった。かかる経験は、もしそれが（部分的に）同時に外的なものでもなかったら、決して内的に生じはしないのである。この関係をカントはつぎのように説明している。

「したがって私が時間において存在するものであるというこの意識は、私が私の外のあるものに対する関係の意識と同じものとして結合している。それゆえ外的なものを私の内官と分かちがたく結合させるものは、経験であって空想ではなく、感官であって構想力ではない。外官はもともとそれ自体、私の外にある何か現実的なものを直観するという関係であり、また外官が実在性をもつのは、構想力の場合とはちがって、ひとえに外官が内的経験を可能ならしめる条件として、内的経験そのものと分かちがたく結びつけられているという事情に基づくのである。」⁽³⁶⁾

このようにカントの内官の実在性は、外官の実在性と必然的に結合して、「経験一般を可能ならしめている。」私の外にある物が私の感官に働きかけることを私が確実に意識するのは、私自身が時間の中に規定されて存在することを私が意識するのと同様に確実なことである⁽⁶⁴⁾。外官の実在は、まさに時間と空間における対象としての現象世界に関係しているから、内官もまた、ヘムスターホイスの道德器官とは違って、拡大解釈の可能性が

「魂の座」

ひらかれている。ノヴァーリスはそれゆえこう問いかける。

「まだ外官の認識は存在するのか？ 自分自身から出て、他の存在へ達する、あるいは他の存在から刺戟されるようなもっと別の道が開かれているだろうか？」⁽⁶⁵⁾

これに対するノヴァーリスの答えが、早くも1798年2月の『花粉』の中に出てくる。

「意識的に感覚の彼岸にあるという能力、自己の外にあるという能力が、人間には備わっていないというのは、きわめて恣意的な偏見である。人間はどんな瞬間にも、超感覚的存在であり得るのである。」⁽⁶⁶⁾

上に挙げた問いと答えとをつなぐ中間に位置するノヴァーリスの思索の証言が、カントの「無制約者」についての抜萃の中にしるされている。ここでは現象世界の限界を越えて、「我々の内部から」無制約者へいたる可能性が示唆されている。それはカントのつぎの発言に続けて、ほんの一言そえられているささやかな言葉ではあるが、カントからの明瞭な離反を示す重要な意味をもっている。

「我々をして現象世界の限界を越えさせるものは無制約者であって、この無制約者を理性があらゆる被制約者に対立せしめて物それ自体の中に求め、またそれによって一連の諸条件を完結したものとして求めるのは必然にして、きわめて当然なことである、/あるいは我々の内部から。⁽⁶⁷⁾」

傍点箇所はノヴァーリスの補足を示しているが、この抜萃にすぐつづけて――

「独断論においては無制約者は矛盾なしには考えられない——しかし相対的観念論においては矛盾は無くなる。——

無制約者の合理的概念の規定は、もっぱら実践理性に委ねられたままである。⁽⁶⁸⁾

周知のごとく、カントにとって無制約者は、物自体の中に見い出されるべきものであって、超感性的領域において思弁的理性は制限をうけている。しかし「形而上学の願いに従って」「一切の可能な経験の限界を超えて」到達すべき無制約者は、「ただ実践的見地においてのみ可能な先天的認識」⁽⁶⁹⁾において探求されうるものである。このように実践理性に委ねざるをえない無制約者も、「相対的観念論」においては矛盾なく考えられる。カントにあっては、現象世界の外にある物自体という仮想の領域でのみ矛盾がなかったのに対し、ノヴァーリスにあっては現象世界の「我々の内部」から矛盾なく考えられる可能性が暗示されているのである。無制約者の先験的概念は、カントにおいては、神、自由、不死と定義されて、認識の拡大が意図されている。そして純粹理性の必然的な実践的使用において、カントは、「信仰に余地を求めるために、知識を除去」⁽⁷⁰⁾した。これによって純粹理性を批判せずに成果を収めようとする形而上学の独断論を排除できたと信じた。ところがノヴァーリスは、このようなカントの確固たる自信をも「独断論」であると批判する。⁽⁷¹⁾啓蒙主義のいわゆる悟性の過信の結果、我々の内にまどろんでしまっている鈍化した能力、すなわち、「意識的に感覚の彼岸にあるという能力」「自己の外にあるという能力」を練磨することによって、実践的使用における理性器官とは違う、あの「道德器官」を人間の内に覚醒して、「他の存在へ達する」可能性が模索されているのである。これはいわば「外的感覚」による無制約者の認識と言い換えてもいい。これを最も端的に表わしているのが、カント・ノートのおつぎの言葉、「我々が無制約者を認識するのは、我々がそれを実現する限りに

「魂の座」

おいてである⁽⁷²⁾であろう。これはヘムスターホイス研究ノートの「我々が知るのは、我々がなすかぎりにおいてである」⁽⁷³⁾に対応する。そして人間の本性も神の本性に一致しうることを述べた、ヘムスターホイスのつぎのことばに関連している。

「〔神の〕本性の、そして我々の神との関係の認識に到達するために、我々の内部に入る必要がある。そして人間性の外観を消さなければならぬ……あなたが主人であり、独裁者であるような、あなたの内部のあらゆるものの中に、神聖なものと同質なものがないかどうか探ることが必要である。我々の能力は、我々の知る限りでは、欲するという能力、行動するという能力から成っている。そしてこの能力を、あなたは宇宙の偉大な支配者に対して拒否してはならないだろう。この能力は、あなたの想像力が秘めているイデーを比較したり、つくったりする知力、知性の中にある。

さて我々は、この能力が、欲したり、行動したりできる自由な存在であることを観た。それゆえあなたは、この能力を至高のジュピターに対しても拒否できないであろう。彼が我々のように、イデーや関係などを比較したり、つくったりするわけではないが……⁽⁷⁴⁾」

世界の秩序と調和を認識し、神を自らの内に内在化する道は、宇宙を自分の内部で実現する以外に求めることができない。

「／神は我々と全く違う仕方で創造するのではない——神はただ組み立てるだけである。／……我々が天地創造を神の御業として知ることができるのは、ただ我々自身がどの程度まで神であるかに応じてである——我々がどの程度まで自ら世界であるかに応じて、それがわからないのである——知識は増していく——我々が神になればなるほど……⁽⁷⁵⁾」

カントは、理論的理性認識を制限するのと引きかえに、実践理性の信仰に基づく要請を正当化した。ところがノヴァーリスは、上の断章に見られるごとく、思弁的理性認識を無限に拡大しようとする。我々は神を現実化し、神に近づくほどに、神を認識できるのであるという。そしてカントの命題を逆転させてつぎのように書きつける——

「知がやむところで、信仰が始まる。／信仰の構成——仮定による構成——ひとはさまざまなものを混ぜ合わせる、さまざまなものを同時に信じることによって。⁽⁷⁶⁾／」

カントは「信仰に場所を空けるために、知識を除去しなければならなかった。」ノヴァーリスはこのような実践理性の出動の要請を解消して、信仰の理論的認識の可能性を示唆する。それはあの「外官による神の認識」にも通じている。「意識的に感覚のあなたにあるという能力」の訓練は、ノヴァーリスにあっては「知識の衝動」に外ならない。それゆえ、ノヴァーリスはこう書き記すのである。

「混合した意志と知識の衝動が——信仰である。⁽⁷⁷⁾」

これには、前の断章と同じく総合を暗示する「混合」ということばが使われている。信仰はさまざまなものの混合によって構成されているのである。カント・ノートには、この総合の領域についてのひとときわ光芒を放つ思索が書き留められている。

「／哲学するというのは、諸学問、思想を考え抜き、認識を認識するというほどのことである——諸学問を学問的に、詩的に取り扱うということである。実践的というのと、詩的というのはひとつだろうか——そして後

「魂の座」

者は外見上ただ絶対的に実践的であるということだろうか？⁽⁷⁸⁾」

「学問はすべて詩化されなければならない⁽⁷⁹⁾」ということばとともに、上の断章の「詩的」というのは、カントの「実践的」と内容が一致するばかりでなく、さらに一步すすめてノヴァーリスの「総合」の領域を暗示する概念である。ここに突然あらわれるポエジー思想は、決して断定的ではない問いの形を取ってはいるが、カントの認識理論を根底から覆す衝撃的内容を含んでいる。すなわち、実践理性の要請に結びつかない、「詩的」にして「実践的」であるような高次の認識の可能性を示唆しているのである。カントにおける純粹理性と実践理性の分裂を止揚し得る総合の領野として、「ポエジー」を考えていると言ってもいい。しかもノヴァーリスは、先天的認識能力をもってしては決して可能な経験の限界を越えることができないような領域にとどまったままである。これは時間と空間のかたにたにある外部感覚の世界である。現象世界にありながら、「自分の外へ出ていく」能力を備えた者にのみ可能な世界である。「ポエジー」思想はすでに、ヘムスターホイス研究によって十分に醸成されていた。つぎのヘムスターホイスのことばが、のちの「ポエジー」概念や「天才」概念に影響を与えたことは明白であろう。

「私は初めてポエジーとは何かがあった。私は、最も深遠な理論、最も賢明で最も考慮された知性の歩みは、もしもそれがイデーを結びつけているこの熱狂に支えられ、導かれていないならば、我々に新しい真実のごくわずかなものしか与えてくれないだろうと感じている。この熱狂の本質についての我々の完全な無知が、我々にはそれがしばしば未知の力のふるまいと混同してみえるのだが、人間は完全な存在の本質が求めているようなものではないというあなたの見解を正当化していると、私は感じている。⁽⁸⁰⁾」

「その上、ポエジーが神のことばと呼ばれるのは、理由がないわけではない。少くともそれは、神が自分と関係のあるあらゆる至高の天才に命じることばである。もしこのことばがなければ、我々の学問においては、ごくわずかの進歩しか達することができないだろう。」⁽⁸¹⁾

ノヴァーリスにおいて「ポエジー」とは、「イデーを結びつける熱中」のことばであり、「神が天才に命じる」言葉である。そこには宇宙の不可視の側面を顕現させてくれるあの高次の道德器官が作用している。諸学問を統合しいわゆる「百科全書学」を実現する、詩と哲学とがひとつであるような神の総合の領域に、ポエジーが位置することは、つぎの断章からも明らかであろう。

「道德的感觉によつてのみ、神は我々に知覚できる。——道德的感觉は…最高者の感觉——調和の感觉……物自体の感觉——真の予見感觉……」⁽⁸²⁾

道德的感觉によつて、理論的および実践的能力の統一が実現されて、有限な実在の中に神が顕現する。「我々が無制約者を認識するのは、それを現実化する限り」であり、「我々が知るのは、我々がそれをなす限り」においてであった。また「我々が何かを知るといふのは、我々がそれを表現し——つまりつくることのできる限りにおいてである」とも言われる。ここでノヴァーリスが、ポエジーをその語源の ποιεῖν (つくる) に遡つて考察していることは明瞭である。哲学とポエジーの緊密な連関を、ノヴァーリスはこのように表現している。

「ポエジーは哲学の主人公である。哲学はポエジーを原理へと高める。それはポエジーの価値を知らせてくれる。哲学はポエジーの理論である。それは、我々に、ポエジーとは何かを、それが一にして全なることを示し

「魂の座」

てくれるのである。⁽⁸⁴⁾

さらに「詩的哲学者とは絶対的創造者 état de Créateur absolu である⁽⁸⁵⁾」⁽⁸⁵⁾と言い、「ポエジーは私の哲学の核である。詩的になればなるほど真になる⁽⁸⁶⁾」⁽⁸⁶⁾とも表現する。ノヴァーリスの「ポエジー」とはこの「詩的哲学者」のことばであり、詩的行為と実践的行為の等置によって、カントの「純粹理性の三つの不可避の課題」をも解決してしまうような領域のことであった。

*

十七世紀以降に現われた理神論、無神論、唯物論などによって、超越神を頂点とする世界と人間の緊迫した関係は崩れ、無神論に^{くみ}与しない思想家は、自然と神と人間の新たな関係の探求に全力を傾注するようになる。ノヴァーリスやカントは、そのような時代思潮のなかにいる。批判期以後のカントは、空間の実在論的把握を捨て、精神を超越し神が臨在する無限な空間の実在性を否定するようになる。⁽⁸⁶⁾空間は外的な感性的直観の本質的形式であるとされる。空間は「神の感覚器官」ではなく、所与として「あらかじめ我々の心のうちに存在する」形式である。⁽⁸⁷⁾カントはこのように空間に観念性を認めることによって、空間の神性を否定し、スピノーザ主義に対抗する。空間は単に外官を制約する形式に過ぎぬゆえに、空間のうちに心的なものを求めるのは誤りである。「魂は外的直観の対象ではないから、空間には存在しない」⁽⁸⁸⁾のである。魂が自らを直観するのは、ただ内官によってのみである。それゆえカントはこう言う、「魂の座 (Sedes animae)。内官の対象にすぎないものは、外官の対象ではありえない。したがって、魂の実体が外的直観に制約されるのではなく、魂の影響が及ぶ主体である身体が制約をうけるのである。⁽⁸⁹⁾」

カントによれば、空間と魂との関係は直接的なものではなく、ただ間接的、派生的、偶然的に空間が魂の存在条件となるだけである。お互に外官

の対象ではありえないような存在者はすべて、外的直観の単なる制約にすぎない空間から自由なのである。⁽⁹⁰⁾ このようなカントの超越論的空間論に比べると、ノヴァーリスはまだ空間の唯一絶対な神性を否定しきっていないように思われる。自然の中に内在化した神を模索するノヴァーリスの歩みは、有限な存在者を神の偶有性とみなすスピノーザ主義とも独特の距離を保っている。

ノヴァーリスのカント研究には、「百科全書学」や「詩的哲学者」のイデー、また「天才」概念や「学問の詩的取り扱い」など、のちのロマン主義者ノヴァーリスの思想世界を構成する重要な思索の萌芽ないし展開が認められるばかりでなく、カントの内官・外官の認識問題と取り組むことによって、内部と外部との総合の場としての「魂の座」に関する重要な着想を得、有限な現象世界に顕現する神を感覚することができるという確信を強めることができたという点に意義が認められるであろう。神をもとめるノヴァーリスの彷徨において、カントが触媒ないし仲介者として、ノヴァーリス固有のロマン的思想世界への橋渡しをし、ポエジー思想を醸成した功績は大きいのである。

注

- (1) P. Kluckhohn (hrsg.): Novalis. Schriften. 4 Bde. Leipzig 1929 Abgek. Kl.
- (2) R. Samuel (hrsg.): Novalis. Schriften. 4 Bde. u. ein Begleitband Stuttgart 1960~ Abgek. HKA
- (3) R. Samuel: Novalis. Der handschriftliche Nachlaß des Dichters. Hildesheim 1973 S. 38
- (4) Th. Haering: Novalis als Philosoph. Stuttgart 1954 S. 626 ff.
- (5) Th. Haering: a. a. O. S. 629
- (6) Th. Haering: a. a. O. S. 18 Vgl. S. 17, S. 20 etc.
- (7) H. Simon: Der magische Idealismus. Heidelberg 1906 S. 24
- (8) K. Hamburger: Novalis und Mathematik. In: Romantik-Forschungen.

Halle 1929

- (9) H. Kuhn: Poetische Synthesis oder Ein kritischer Versuch über romantische Philosophie und Poesie aus Novalis' Fragmenten. In: Text und Theorie. Stuttgart 1969
- (10) R. Lauth: Die Entstehung von Schellings Identitätsphilosophie in der Auseinandersetzung mit Fichtes Wissenschaftslehre (1795-1801). Freiburg i. Br. 1975 隈元忠敬訳『フィヒテからシェリングへ』以文社 1982 p. 3~
- (11) M. Dick: Die Entwicklung des Gedankens der Poesie in den Fragmenten des Novalis. Bonn 1967
- (12) M. Dick: a. a. O. S. 1
- (13) M. Dick: a. a. O. S. 1
- (14) H.-J. Mähl: Eine unveröffentlichte Kant-Studie des Novalis. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 36. Jahrgang 1962. Dieser grundlegende Aufsatz hat einer neuen Betrachtungsweise für die Novalis-Forschung Raum geschaffen. Die vorliegende Darstellung verdankt dieser Arbeit.
G. Schulz: Novalis. Reinbek bei Hamburg 1969
- (15) Vgl. H. Ritter: Der unbekannte Novalis. Göttingen 1967. Ritterによれば, Novalisの筆名は『花粉』発表の1798年4月に初めて使用された。従ってそれ以前は本名の Friedrich von Hardenberg で呼ぶべきであるという。本稿は Novalis に統一した。
- (16) G. Schulz: a. a. O. S. 27 ff.
- (17) C. L. Reinhold: Briefe über die Kantische Philosophie. Leipzig 1790 bis 1792
Vgl. U. Schultz: Kant. Reinbek bei Hamburg 1965 SS. 112, 113, 131 f, 133, 159
A. Ph. König: Denkformen in der Erkenntnis. Die Urteilstafel bei Immanuel Kant und Karl Leonhard Reinhold. Bonn 1980
W. Teichner: Rekonstruktion oder Reproduktion des Grundes. Die Begründung der Philosophie als Wissenschaft durch Kant und Reinhold. Bonn 1976
- (18) K. L. Reinhold: Versuch einer neuen Theorie des menschlichen Vorstellungsvermögens. Prag und Jena 1789

- (19) K. L. Reinhold: a. a. O. S. 200
- (20) Brief an den Geh. Finanzrat von Opper in Dresden vom Ende Januar 1800. In: HKA IV S. 310
- (21) HKA I S. 537 ff.
- (22) HKA IV S. 89-102
- (23) U. Schultz: a. a. O. S. 132 f.
- (24) C. Chr. E. Schmid: Wörterbuch zum leichtern Gebrauch der Kantischen Schriften. Neu hrsg. von N. Hinske. Darmstadt 1976 S. XIVff.
- (25) HKA II S. 191 Nr. 269
- (26) G. Schulz: a. a. O. S. 29 ff.
G. Schulz: Die Berufslaufbahn Friedrich von Hardenbergs. In: Novalis. Darmstadt 1970 S. 287 f. HKA IV S. 567 f. u. S. 570
- (27) Brief an Professor Reinhold vom 5. Okt. 1791 In: HKA IV S. 95.
- (28) HKA IV S. 4
- (29) M. Preitz: Friedrich Schlegel und Novalis. Darmstadt 1957 S. 33/43.
H.-J. Mähl: a. a. O. S. 44
- (30) J. L. Döderlein: Neue Hegel-Dokumente. In: Zs. f. Religions- und Geistesgeschichte. I 1948 S. 7.
- (31) フォヒテ研究についてはつぎを参照. 柴田陽弘:『ノヴァーリスの >神<』以文社 1976 柴田陽弘:「総合としてのカオス」『理想』1975.
- (32) H.-J. Mähl: a. a. O. S. 45 f.
- (33) C. A. Eschenmayer: Sätze aus der Natur-Metaphysik auf chemische und medicinische Gegenstände angewandt. Tübingen 1797
- (34) I. Kant: Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft. Riga 1786
- (35) I. Kant: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten. Riga 1785 2. Aufl. 1786 II. Teil 1797
- (36) J. G. Fichte: Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. 1794
- (37) J. G. Fichte: Grundriß des Eigentümlichen der Wissenschaftslehre. 1795
- (38) J. G. Fichte: Grundlage des Naturrechts nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre. 1796
- (39) HKA II S. 392
- (40) HKA II S. 460 u. S. 462 Nr. 103

「魂の座」

- (41) HKA III S. 420 Nr. [782.]
- (42) HKA III S. 339 Nr. 472
- (43) HKA III S. 420 Nr. [782.]
- (44) HKA III S. 335 Nr. 460
- (45) HKA III S. 335 Nr. 463
- (46) HKA II S. 391 Nr. 46
- (47) HKA II S. 143 Nr. 69
- (48) R. Lauth (hrsg.): Philosophie aus einem Prinzip Karl Leonhard Reinhold. Bonn 1974 S. 1 ff.
- (49) S. Th. Sömmerring; Über das Organ der Seele, nebst einem Schreiben von I. Kant. Königsberg 1796 S. 83-85
- (50) HKA II S. 380 Nr. 42
- (51) S. Th. Sömmerring: a. a. O. S. 86 Vgl. HKA II S. 331
- (52) HKA II S. 418 Nr. 19
- (53) HKA III S. 272 Nr. 179
- (54) HKA IV S. 35
- (55) HKA II S. 562 Nr. 179
- (56) F. Hemsterhuis: Alexis, ou de l'âge d'or. In: Œuvres Philosophiques de M. F. Hemsterhuis. 2 Bde. Paris 1792 T. II p. 166
- (57) HKA II S. 412 Nr. 1
- (58) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 100
- (59) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. I p. 241
- (60) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 247
- (61) HKA II S. 390 Nr. 46
- (62) I. Kant: Kants Werke. Akad.-A. IV S. 471
- (63) I. Kant: Akad.-A. I S. XL Anm.
- (64) I. Kant: Akad.-A. I S. XLI Anm.
- (65) HKA II S. 390 Nr. 46
- (66) HKA II S. 420 Nr. 23
- (67) HKA II S. 386 Nr. 44 Kant I S. XX
- (68) HKA II S. 386 Nr. 44 Kant I S. XX/XXI
- (69) Kant I S. XXI
- (70) Kant I S. XXX/XXXI
- (71) Vgl. Anm. (43)

- (72) HKA II S. 386 Nr. 44
- (73) HKA II S. 378 Nr. 39 Vgl. S. 589 Nr. 267 Lettre de M. F. H. Jacobi à M. Hemsterhuis. In: Fr. Hemsterhuis, a. a. O. T. II p. 318 » En un mot, nous savons à mesure que nous faisons; voilà tout «
- (74) Fr. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 95 f.
- (75) HKA II S. 378
- (76) HKA II S. 387
- (77) HKA II S. 395 Nr. 58
- (78) HKA II S. 390 Nr. 45 III
- (79) Brief an A. W. Schlegel vom 24. Febr. 1798. „Künftig treib ich nichts, als Poesie—die Wissenschaften müssen alle poetisiert werden —von dieser realen, wissenschaftlichen Poesie hoffe ich recht viel mit Ihnen zu reden.“ In: HKA IV S. 252
- (80) Fr. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 161
- (81) Fr. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 154
- (82) HKA III S. 250 Nr. 61
- (83) HKA II S. 589 Nr. 267
- (84) HKA II S. 590 Nr. 280
- (85) HKA III S. 415-Nr. 758
- (86) H. Heimsoeth: Studien zur Philosophie Immanuel Kants I. Bonn 1971 S. 116 ff.
- (87) H. Heimsoeth: a. a. O. S. 120
- (88) H. Heimsoeth: a. a. O. S. 122
- (89) H. Heimsoeth: a. a. O. S. 217 Kant XVIII 5459
- (90) H. Heimsoeth: a. a. O. S. 218